

サンダル履きまま旅

3

◇トルコが“親日国”なわけ◇

寺井融

Terui Toru

トルコの政情不安が続いている。日本外務省では、二〇〇七年十月二十五日にイラク国境に接するハッカリーとシュルオクの二県に、「渡航の是非を検討して下さい」という「警告」を出している。イスタンブール及び南東部の十県には、「十分に注意して下さい」との「注意情報」である。

イラクのフセイン政権が倒れ、クルド自治区が圧政から解放されたことに、要因の一つがある。自治区が基地となって、トルコ国内での爆弾テロ活動が活発化したためだ。

クルド人は、中東を中心に世界で三千万人が住み、領土を持たない最大の民族と言われている。そのうち一千五百万人が、トルコ国内に居住しているのである。約七千五百万人の人口を擁する同国に

とっては、大変高い比率であり、大きな社会問題となっている。

「チャイ」をごちそうに
「ジャパン・グレート」

十数年前になるが、そのトルコ、しかもクルド人が多く住む東部地方を、団体バス旅行したことがある。われわれのバスが田舎を走るときには、常にパトカーの先導がつき、警護をしてくれた。

と書くど、さも物々しく感じるが、実はのんびり、ゆったりした旅であった。地方都市では、地元の人に何度かお茶をごちそうになったりもした。茶といっても、濃いトルココーヒーではない。同じ濃くても、紅茶である。彼らがいうところ



地方都市で見かけた家族（中年以上の女性はスカーフ姿）

の「チャイ」。これが飲みやすく、旅の休憩の友定番となっていましたね。

ふらりと町のチャイ屋に入る。「アー・ユー・ア・ジャパニーズ？」と訊かれる。「イエス」と答える。そうすると、たちまち客たちが寄ってきて話しかけられる。チャイは店主のおごりとなったり、客の誰かが勘定を持ってくれたりとなる。

電気店のショーウィンドウを眺めていたら、中から手招きされた。入ってみると、店主に椅子を勧められる。「ソニー・ナンバー・ワン」「トヨタ・

ナンバー・ワン」ジャパン・グレート・カントリー」などと言われ、小僧をどこかに走らせた。しばらくすると、チャイが出前され、またご馳走になってしまった。

エルトゥールル号座礁事故 明治維新を模範に国づくり

トルコは、世界三大親日国の一つなのである（ほかはミャンマーと台湾）。

なぜ、そうなったか。まずは、一八九〇年のエルトゥールル号の遭難があげられる。トルコ船で、日本親善視察旅行からの帰路、和歌山沖で座礁。

五百八十一名が死亡し、生存者は六十九名の惨状に対して、日本側は「生存者の救助、介護、犠牲者の遺体や遺品の探索、沈没したエルトゥール号



イスタンブールの魚屋

の引き揚げなど、官民を挙げて実に手厚く行われた」（山口洋一著『トルコが見えてくる』）からである。生存者は、のちに日本の



地方都市で見かけた若い女性たち

巡洋艦で丁重に送還された。第二は一九〇四―〇五年の日露戦争である。大国ロシアを小国日本

が破ったことに、トルコは大いに勇気づけられた。その後、トーゴとか、ノギといった姓を名乗る人も出たのである。言わずもがなだが、日露戦争の英傑、東郷平八郎提督や乃木希典將軍にちなんでつけられたものである。首都アンカラにある一番高級な靴店は、トーゴ（TOGO）という（前述書参照）。

第三はトルコ共和国建国の父、ケマル・アタチュルクが明治天皇を尊敬し、明治維新から始まる日本の近代化を模範として、国づくりに励んだこと。第四は朝鮮戦争で西側の一員として戦ったトルコ兵が、休養等で日本に立ち寄った際、あたたかく接してもらったことである。「日本はいいよ」とクチコミで評判を呼んだのだ。

そんなこんなもあって、現代の日本人が、彼らで親切を受けることになる。

三五〇ドルが二〇〇ドルに
絨毯商人にしてやられたか？

そうはいつでも、イスタンブールのグランドバザールでのことだ。

ちよつと洒落た黒のバックスキンのジャンパーを見つけた。

売り子が「安いよ。イタリアじゃ七百ドルはするよ。こちらで作ったのを持っていつて、タグをつけてイタリア製になるんだ。同じ品物だよ。三百五十ドルに負けとくから」と言ってくる。

「百ドルなら、買うよ」

「冗談じゃない」

「ああ、そう」

と立ち去ったら、追いかけてきて「二百ドルにする」。

「いらぬ」と答えると、百五十ドルとなり、ついには百二十ドルとなったので、つい「買った」



トルコ絨毯

と言ってしまった。

仲間に「買いた物がうまいね」と言われたけれど、本当にそうだったのだろうか。バザールの「絨毯商人」に、うまくしてやられた気がしないわけでもない。

多々ある名所に魅力的な料理 世界三代絨毯生産国

トルコには、奇岩群のカップパドキア、石灰棚と温泉のバムツカレ、ペルガモンの都市遺跡、トロイの木馬、トピカピ宮殿と、観光名所が目白押し。写真を撮り出したらきりが無い。

加えてもう一つの魅力は、食事である。レンズ豆とミントのスープ(花嫁のスープ)、鰯の蒸し焼き、白隠元とミートシチュー、ドルマ(米と挽き肉の詰めもの)、ナスのオリーブ油冷製など、おいしい料理は、星の数ほどはオーバーとしても、太陽系の惑星数以上はある。トルコ料理は世界三大料理の一つなのだ(ほかはフランス料理と中華料理)。お土産として、トルコ料理の本(もちろん日本語写真入り)を買った。

また、トルコは、世界三大生産国(ほかはペルシアに中国)であり、品質の高い絨毯を生産することで知られている。値段も高かった(一千ドル)が、「日本では数倍もするんですよ」の売り子の一声で、「畳ほどの絨毯を衝動買いし、船便として送った。いまでは、わが家のリビングで活躍している。

アジアそれともヨーロッパ EU加盟を切望するが…

ところで、トルコはアジアかヨーロッパか。国土面積の97%はアナトリア(アジア地域)に属しているし、トラキア(ヨーロッパ地域)は3%に過ぎない。民族的にもアジア系が多い。日本の外務省のホームページでも、アジアでも欧州でもなく、中東地域に掲載されている。しかし、彼の国はEU(欧州連合)加盟を切望しているのだ。既にN



イスタンブールで見かけたセブンイレブン

ATO(北大西洋条約機構)に加盟しており、安全保障上はヨーロッパと運命共同体といってよい。トルコ旅行の最中、在日経験もあるインテリ青年と知り合った。「なんで国防費が高いの」と質問したところ、「国防こそ最高の福祉ですよ。国民の生命、財産が守れなくて、福祉政策だけを唱えてみてもはじまらないでしょ」との答えであった。「ロシア(旧ソ連)の脅威は、薄まったんじゃないの」

「でも、わが国はイラン、イラク、シリアと価値観の違う国に囲まれているんですよ」

「ギリシャとの争いのほうが大変じゃない?」
「ええ、領土問題があります。でも、あの国は民主国家です。わが国と同じ価値観に立つ国です。話し合いで解決する可能性があります。しかし、宗教国家とは、そうは行きません」

たしかに、トルコはイスラム主義を前面に掲げる国ではない。とはいえ、現在は中道右派で、イスラム色の強い公正発展党(AKP)が第一党を占めている。EU加盟が、見えてきていない。

■てらいとおる 昭和22年生まれ、46年、中大法卒。雑誌編集者、新聞記者を経て現在、尚美学園大学非常勤講師、ロングステイ財団広報委員、日本旅行作家協会会員、『サンダル履き週末旅行』(竹内書店新社)をはじめとする旅行記のほか、近刊としてエッセイ『裏方物語』(時評社)がある。